

第1章 歴史的風致形成の背景

1 自然的環境

(1) 位置

伊豆の国市は、伊豆半島の北部、田方平野^{たがたへいや} ほぼ中央に位置している。市の東側には箱根山系の山々が峰を連ね、西側には城山^{じょうやま}、葛城山^{かつらぎやま}といった山に囲まれている。平野部には南北に狩野川^{かのがわ}が流れ、自然の豊かな恵みを楽しんでいる。狩野川に沿うように国道136号と伊豆箱根鉄道が走り、その周辺には市街地が形成されている。東京からは100km圏内にあり、自動車では、東名高速道路・伊豆縦貫自動車道・国道136号バイパス（伊豆中央道）を利用して約85分、電車では、東海道新幹線・伊豆箱根鉄道を利用して約80分である。

伊豆の国市は、静岡東部の中心地である沼津市や三島市にも近く、利便性に富んだ場所に位置している。

図1-1 伊豆の国市の位置図



1 (2) 地形・地質・水質

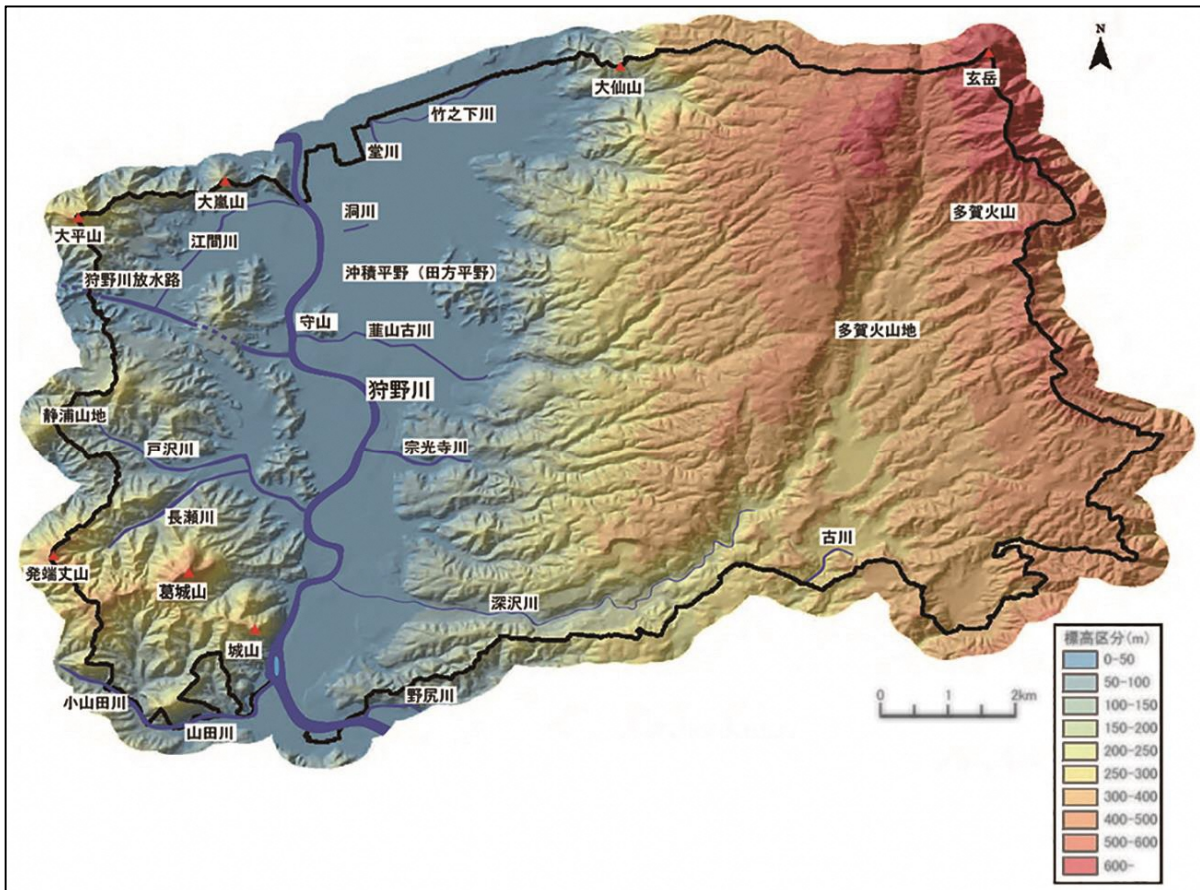
2 ア 標高区分

3 市域の北東端は多賀火山の最高地点である玄岳（798m）が位置し、市域の東側は、
4 多賀火山地が連なり、600m以上の標高となっている。

5 一方、市域西側の0～50mの平地部分は市域の1/3程度を占め、狩野川の沖積平野の
6 田方平野が広がっている。

7 また、狩野川の西側は静浦山地しずうらと呼ばれ、本市の城山（342m）まで連続した山地を
8 形成している。狩野川東側に所在する守山周辺は標高100m程の独立丘を形成している。

12 図1-2 伊豆の国市域の標高区分図



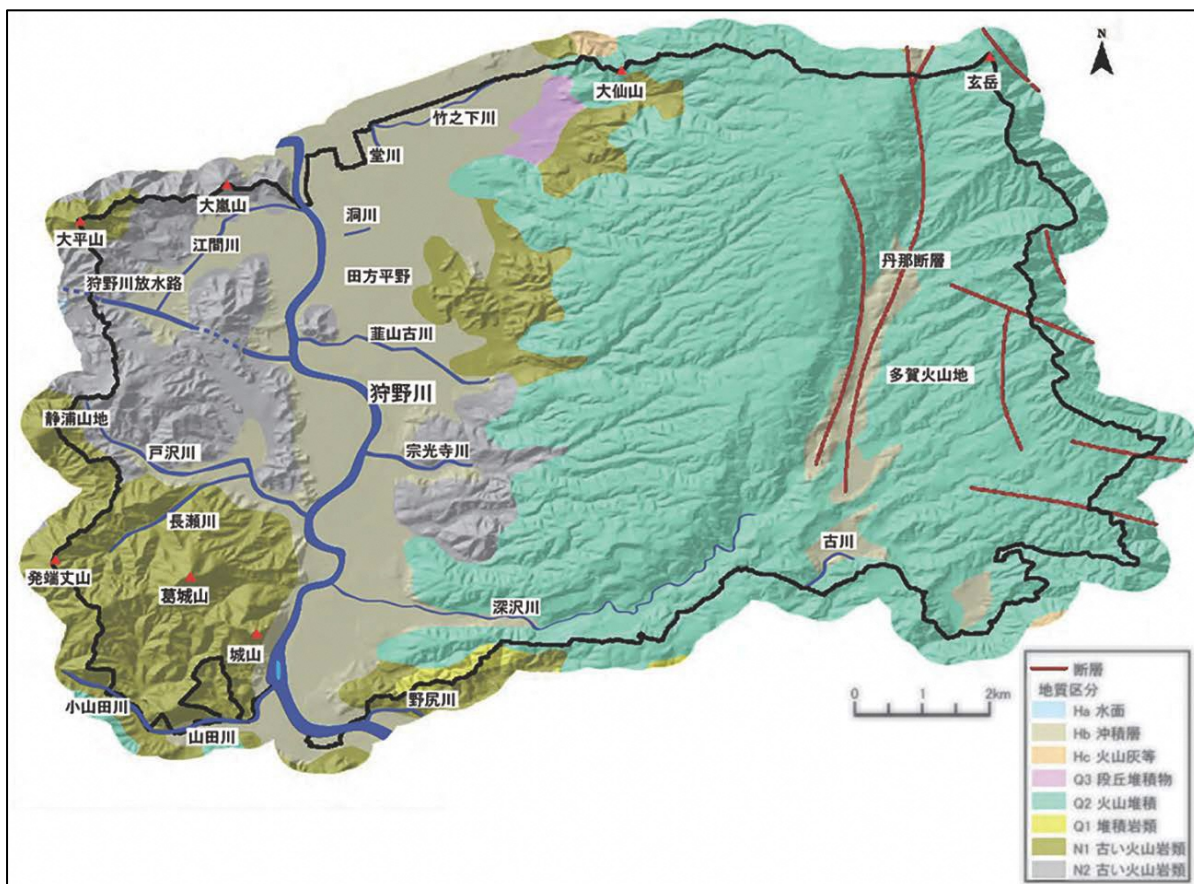
33
34 資料：国土地理院 基盤整備図情報 HP のデータを使用

1 イ 地質区分

2
3 地質区分では、市域の西側の静浦山地の大半は白浜層群などの火山岩で構成されてい
4 る。市域の東側の多賀火山地は、中期更新統の箱根古期外輪山溶岩の火山堆積岩が多く
5 を占めている。

6 また、箱根山南麓から函南町の丹那盆地をとおり、本市を縦断し、南の伊豆市へ延び
7 る 30 k mほどの丹那断層帯を代表する丹那断層が走っている。この断層により、昭和 5
8 年(1930)の北伊豆地震が引き起こされている。

12 図 1-3 伊豆の国市の市域の地質区分図



33 資料：地質調査総合センターHPより シームレス地質図データベース

1 **ウ 河川**

2 伊豆の国市は、全域が一級河川狩野川水系に含まれ、洪水対策として狩野川から分派
3 して放水路が開削され、駿河湾に注いでいる。

4 狩野川は、本市の中央を流れ、大仁^{おおひと}地区で右支川の深沢川と宗光寺川^{そうこうじ}を併せ、狩野
5 川放水路を分派した後、葦山古川、洞川などの右支川を併せて北流している。

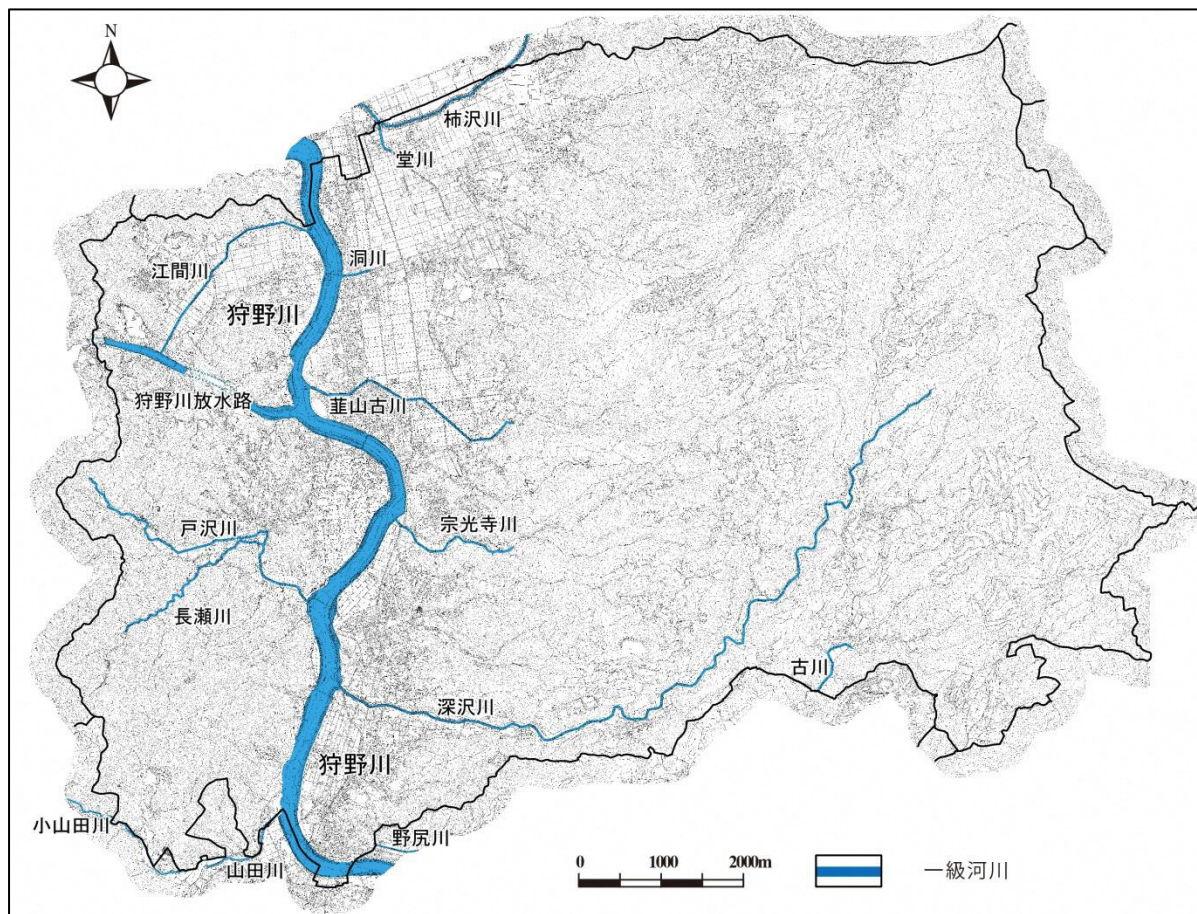
6 狩野川流域は火山地帯で、火山噴出物により構成されるため、流域の多くは脆弱であ
7 り、大雨により崩壊しやすく、洪水の発生の要因となっている。

8 度重なる洪水により、狩野川はその流路を変えてきている。現在の河道に固定される
9 ようになる前は、田方平野に入った後、いくたびか左右に流路を変えており、古地図や
10 古写真で旧河道跡を確認することができる。

11
12 **表 1-1 狩野川水系の一級河川**

区分	河川名
狩野川	柿沢川、堂川、洞川、葦山古川、宗光寺川、戸沢川、長瀬川、深沢川、山田川、小山田川、野尻川、古川、江間川
狩野川放水路	江間川

13
14 **図 1-4 伊豆の国市の市域の狩野川水系の一級河川位置図**



1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29



狩野川大橋付近から下流側を望む（上流部：城山付近）



横山坂付近より狩野川を望む（中流部：水面に朝焼けの逆さ富士）



ままのうえ
堀之上堤外地公園より狩野川を望む（下流部：狩野川桜公園の桜並木）

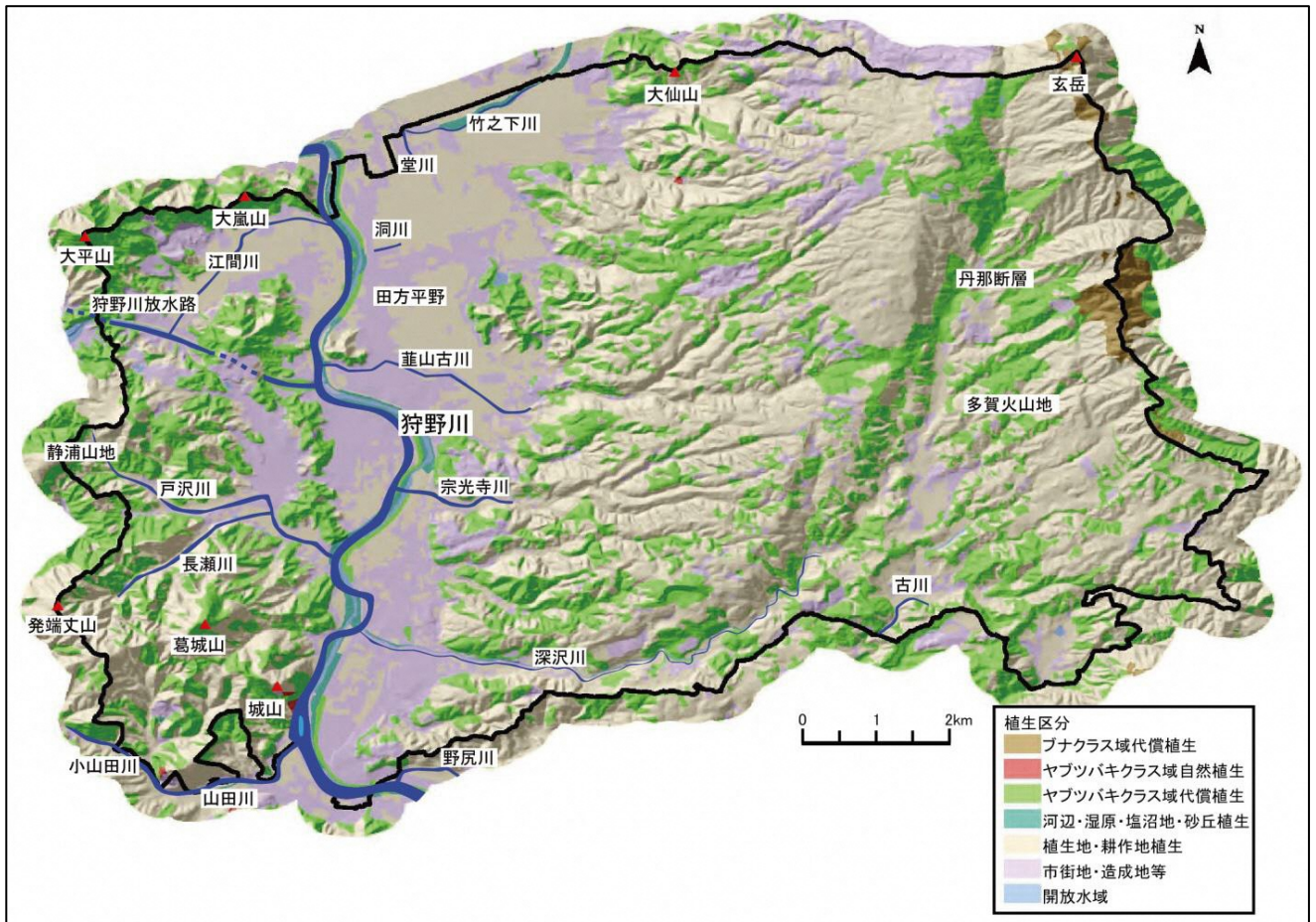
1 エ 植生

2 市域の植生は、ブナクラス域とヤブツバキクラス域の2つの植生帯に該当している。
3 また、自然植生は、ムクノキ-エノキ群落やヤナギ低木群落の一部で、市域のほとんど
4 が代償植生であり、植林地・耕作地植生が最も多く、市街地・造成地等、ヤブツバキク
5 ラス域代償植生がそれに次いでいる。

6 ※植生は「自然植生（原生林）」と「代償植生（人間の影響を受けた二次林）」に大
7 別される。

8 ※クラス域とは、広域分布している主な自然植生の生育域を示すもので、「高山帯
9 域（高山草原とハイマツ帯）」、「コケモモトウヒクラス域（亜高山針葉樹林域）」、
10 「ブナクラス域（落葉広葉樹林域）」、「ヤブツバキクラス域（常緑広葉樹林域）」
11 の各クラスに区分されている。

12
13 図1-5 伊豆の国市の市域の植生区分図



34 資料：自然環境基礎調査 現存植生図 HP のデータを使用

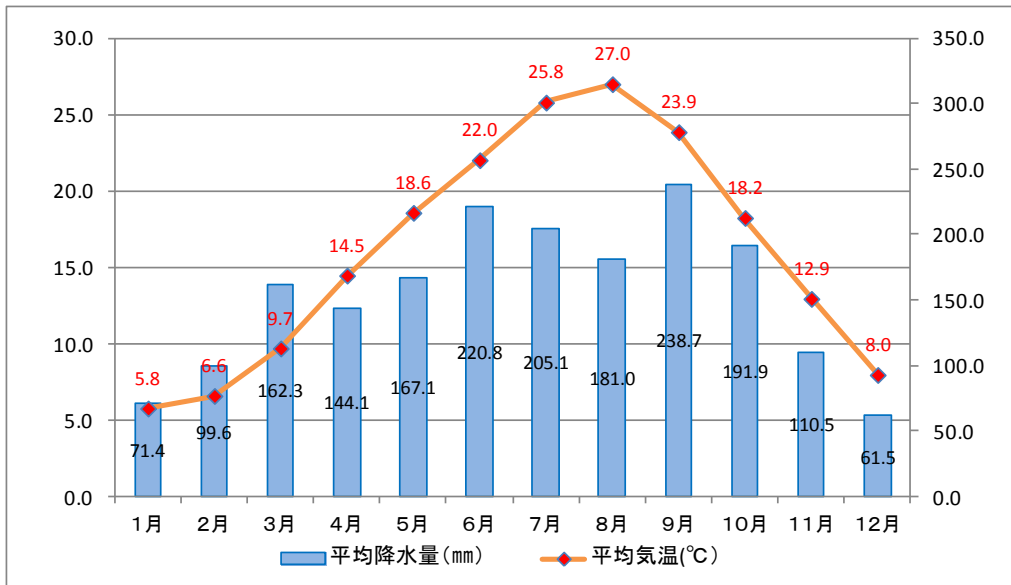
1 (3) 気象

2 本市の年間平均気温を昭和 60 年 (1985) より平成 26 年 (2014) までの 30 年間
 3 の気象観測データでみると、年平均気温は、16.1℃、年間平均降水量は 154.5 mm で
 4 ある。

5 月別には、8 月が最も高く 27.0℃、最低気温は 1 月の 5.8℃となっている。

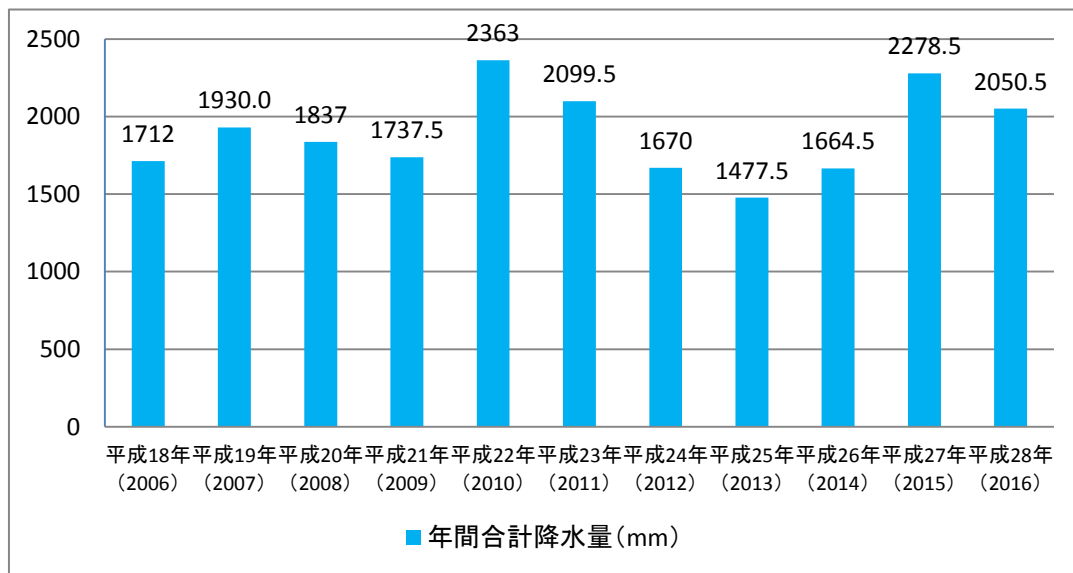
6 また、平成 18 年 (2006) 以降の年間合計降水量は、平成 22 年 (2010) 年が 2363mm
 7 と最も多く、平成 25 年 (2013) の 1477.5mm が最も少ない。

8 図 1-6 月別平均気温・平均降水量、年間降水量



21 資料：国土交通省気象台（三島特別地域気象観測所データ）

22 昭和 60 年 (1985) から平成 26 年 (2014) までの 30 年間の平均値を示す



36 資料：国土交通省 気象庁 HP（静岡県三島年ごとの値より抜粋）

2 社会的環境

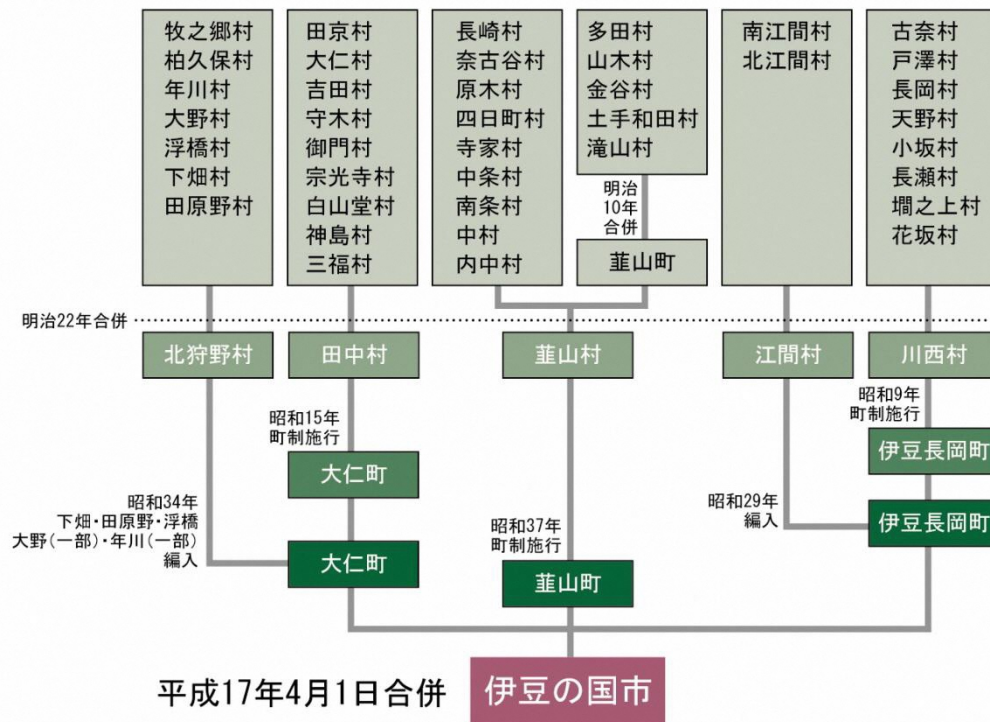
伊豆の国市の沿革は、古くは「伊豆国」と呼ばれ和名類聚抄^{わみょうるいじゅうしょう}（930～935年編）によると、田方郡を含み那賀、賀茂の3郡、21郷があったとされる。

明治期に7村が合併して北狩野村、9村が合併して田中村、9村と5村が合併した葦山町が合併し葦山村、2村が合併し江間村、8村が合併し川西村となり、5つの村となった。

昭和期の町制施行により、北狩野村と田中村が合併し大仁町、葦山村は葦山町、江間村と川西村は合併し伊豆長岡町となった。

平成15年7月29日に伊豆長岡町・葦山町・大仁町合併協議会の設立準備会が発足し、3回の準備会が行われた。平成15年10月22日に伊豆長岡町・葦山町・大仁町合併協議会が発足し、22回の合併協議が行われた。平成17年（2005年）4月1日に、旧葦山町、旧伊豆長岡町、旧大仁町の3町が合併し、現在の「伊豆の国市」が誕生した。

図1-7 伊豆の国市域沿革



資料：伊豆の国市市勢要覧

1 (1) 土地利用

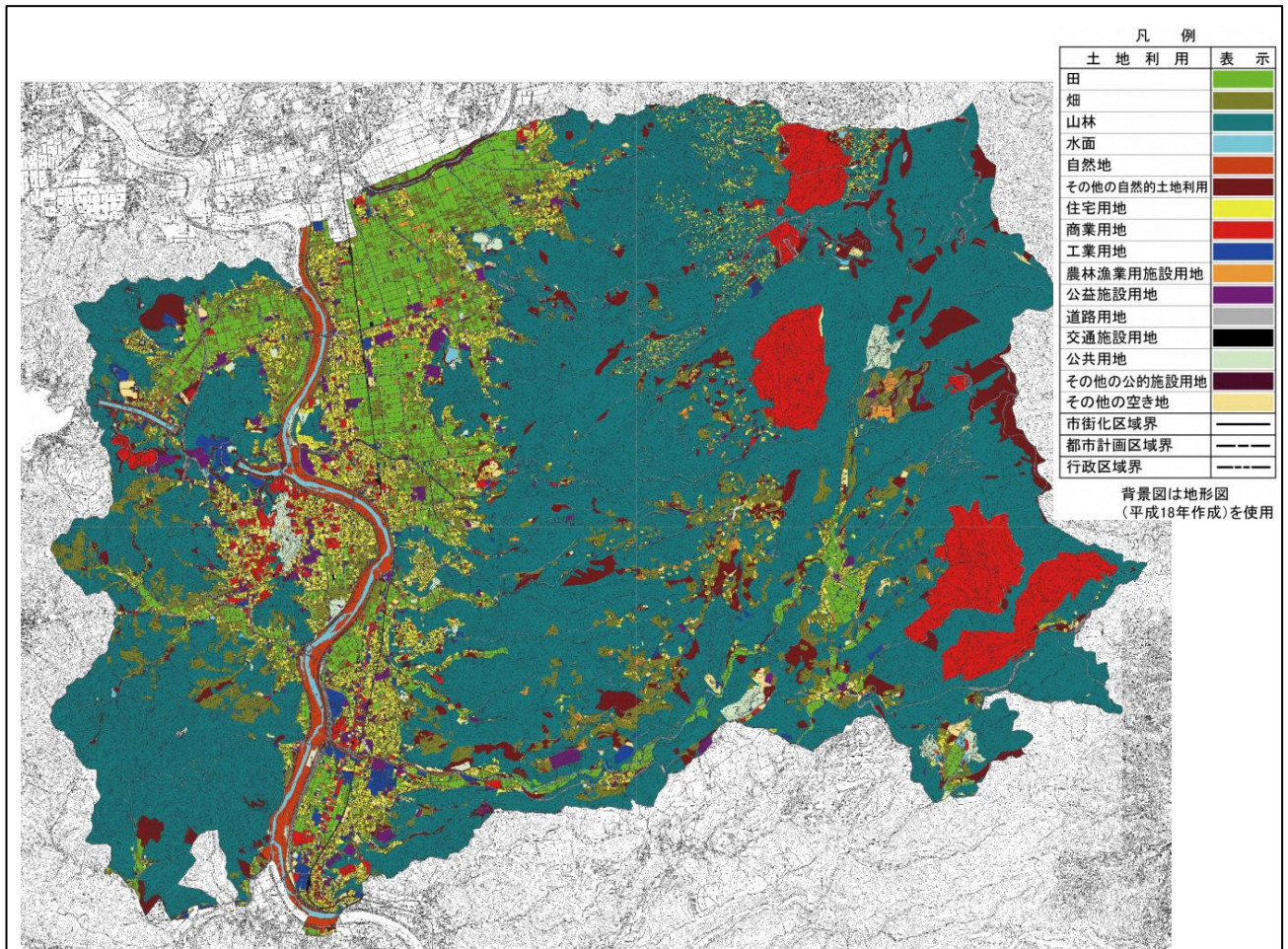
2 本市の面積は 94.71k m²で、そのおよそ 50%が森林（山林・原野）という豊かな
 3 自然に恵まれた環境を有している。また、自然的土地利用のうち、畑地は7.3%、田
 4 は7.4%となっている。一方、都市的土地利用では、住宅地が8.5%、その他が17.4%
 5 となっている。

6
7 表 1-2 伊豆の国市の土地利用

区分	宅地	農用地		鉱泉地	池沼	山林	原野	雑用地	その他	合計
		田	畑							
面積 (ha)	809	705	689	0	5	2,930	1,927	761	1,645	9,471
構成比 (%)	8.5	7.4	7.3	-	0.1	30.9	20.3	8.0	17.3	100

8 資料：伊豆の国市統計書

9
10 図 1-9 土地利用現況図



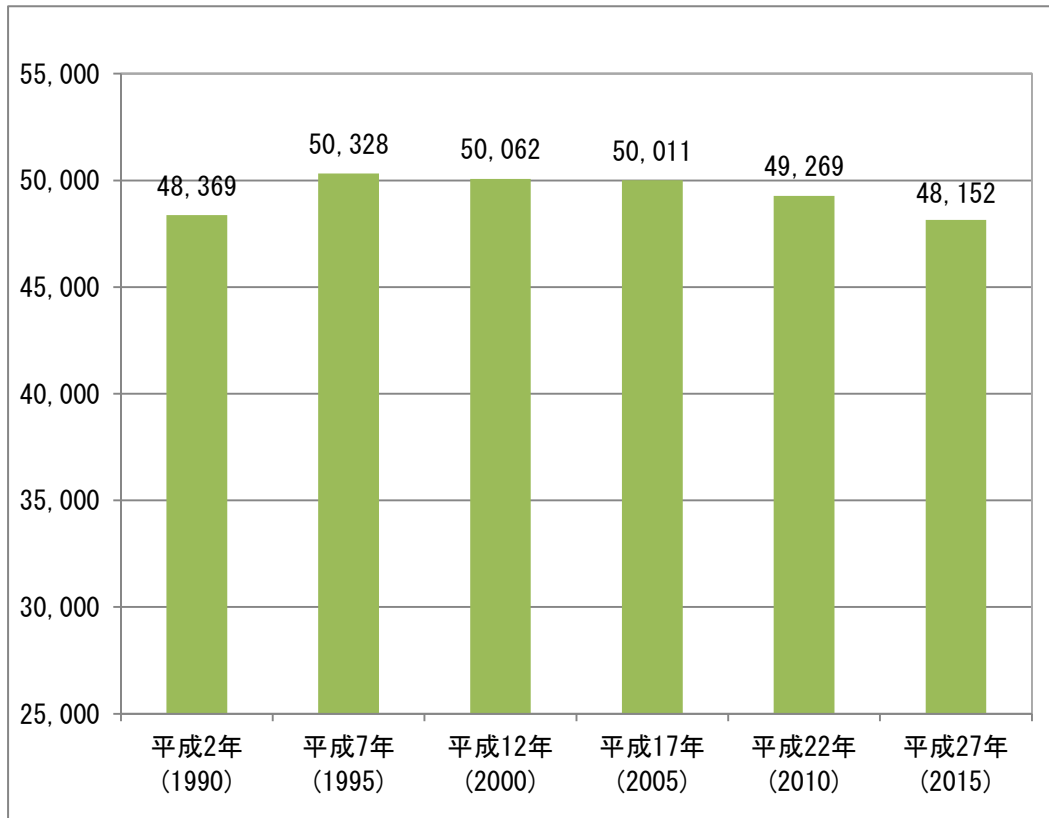
31 資料：平成 22 年度 (2010) 都市計画基礎調査

1 (2) 人口

2 ア 人口の推移

3 本市の総人口は、平成2年(1990)から平成7年(1995)まで増加した後、平成7年
4 (1995)をピークに減少に転じ、その後も漸減傾向が続き、平成27年(2015)には48,152
5 人となっている。

7 図1-10 総人口の推移



26 資料：国勢調査

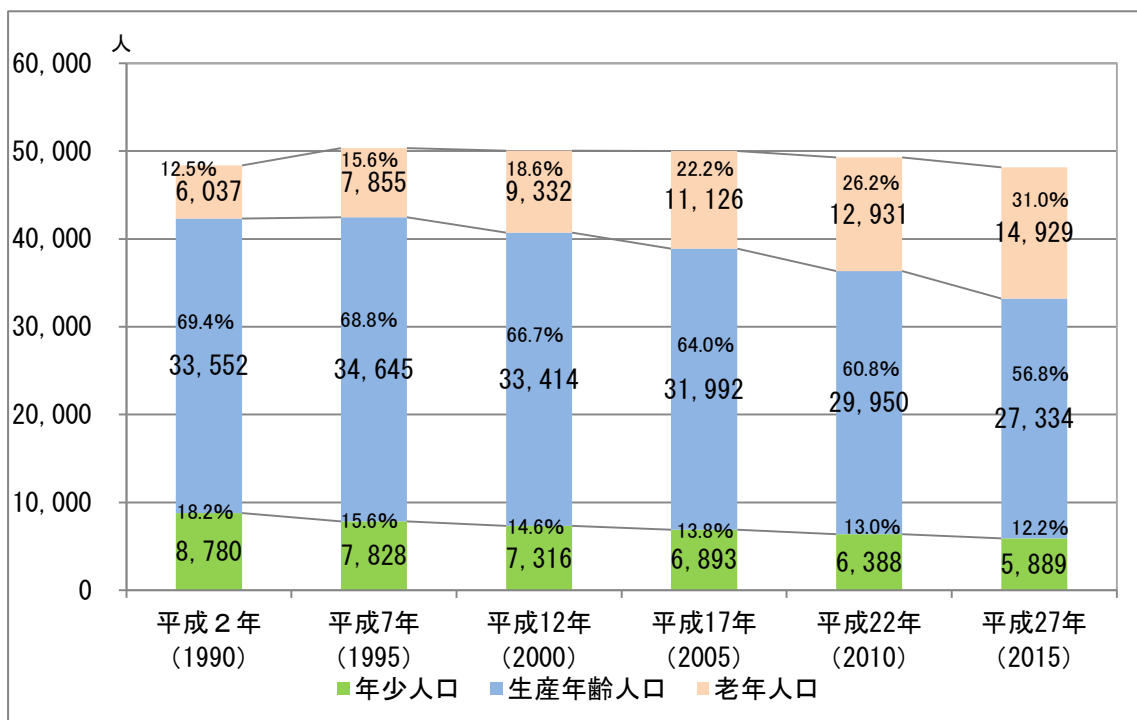
27

年少人口（0～14歳人口）は、平成2年（1990）の8,780人（18.2%）から減少し続け、平成27年（2015）年には5,889人（12.2%）となった。

生産年齢人口（15～64歳人口）は、平成2年（1990）の33,552人（69.4%）から平成7年（1995）には、34,465人（68.8%）まで増加したが、平成7年（1995）以降は減少に転じ、平成27年（2015）には、27,334人（56.8%）となっている。

老年人口（65歳以上）は、平成2年（1990）の6,037人から平成27年（2015）には14,929人と25年間で約2.47倍に増加し、高齢化率は、平成2年（1990）の12.5%から平成27年（2015）には31.0%まで上昇している。

図1-11 年齢3区分別人口の推移



資料：国勢調査

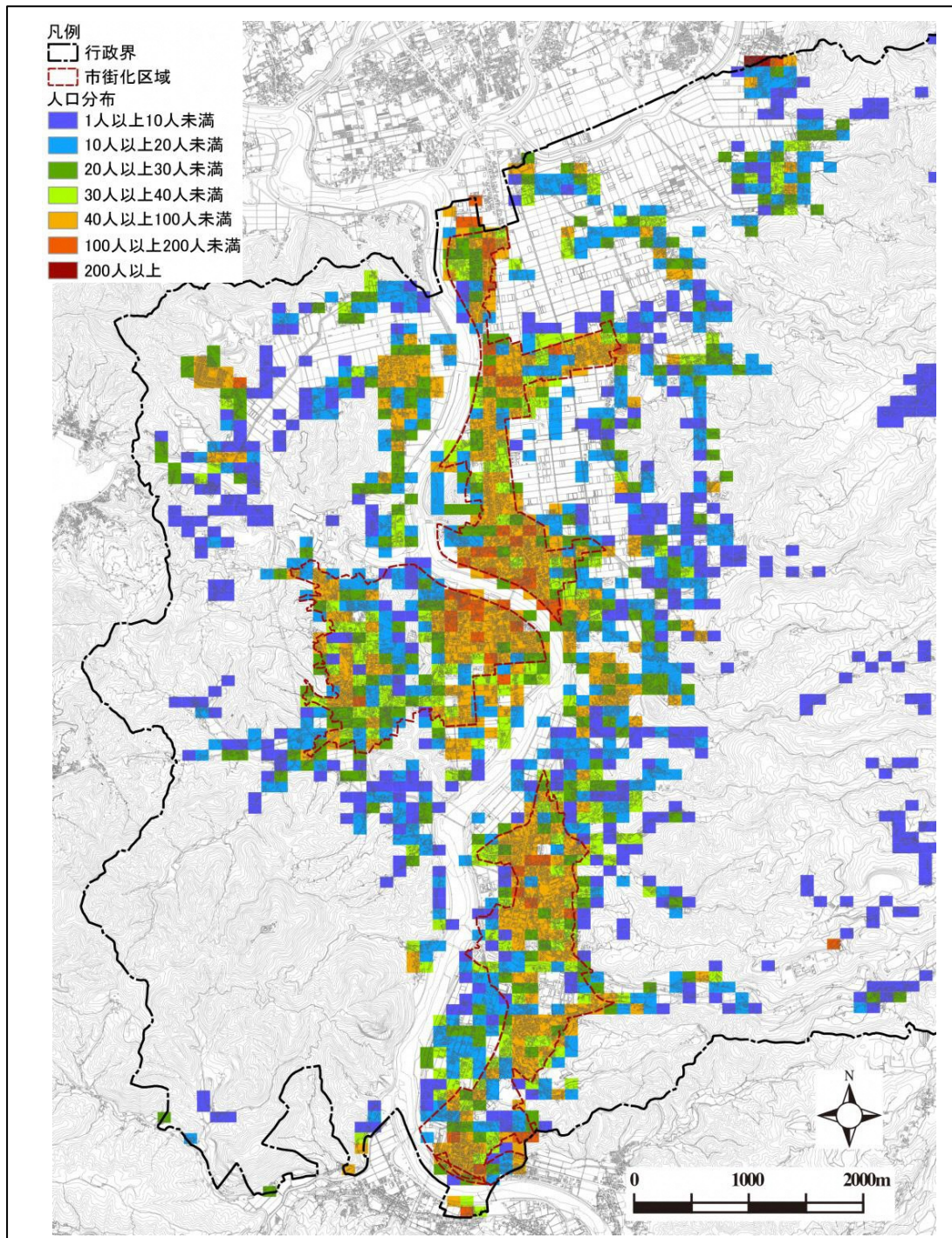
イ 人口分布

市街化区域面積は、594.3 ha で、このうち可住地面積は 332.81 ha (56.0%) となっている。人口の約6割が居住する市街化区域は、地形的な制約もあり、人口密度は高い。

市街化調整区域面積は、8,876.7 ha で、可住地面積は 7,042.07ha (79.3%) となっている。人口の約4割が市街化調整区域に居住している。

このため、将来的な人口減少とともに、市街化区域内の史跡の保存を考慮し、立地適正化計画に基づき、コンパクトな都市形成を進めている。

図1-12 人口分布図（平成22年（2010）国勢調査）



1 (3) 交通機関

2 ア 鉄道

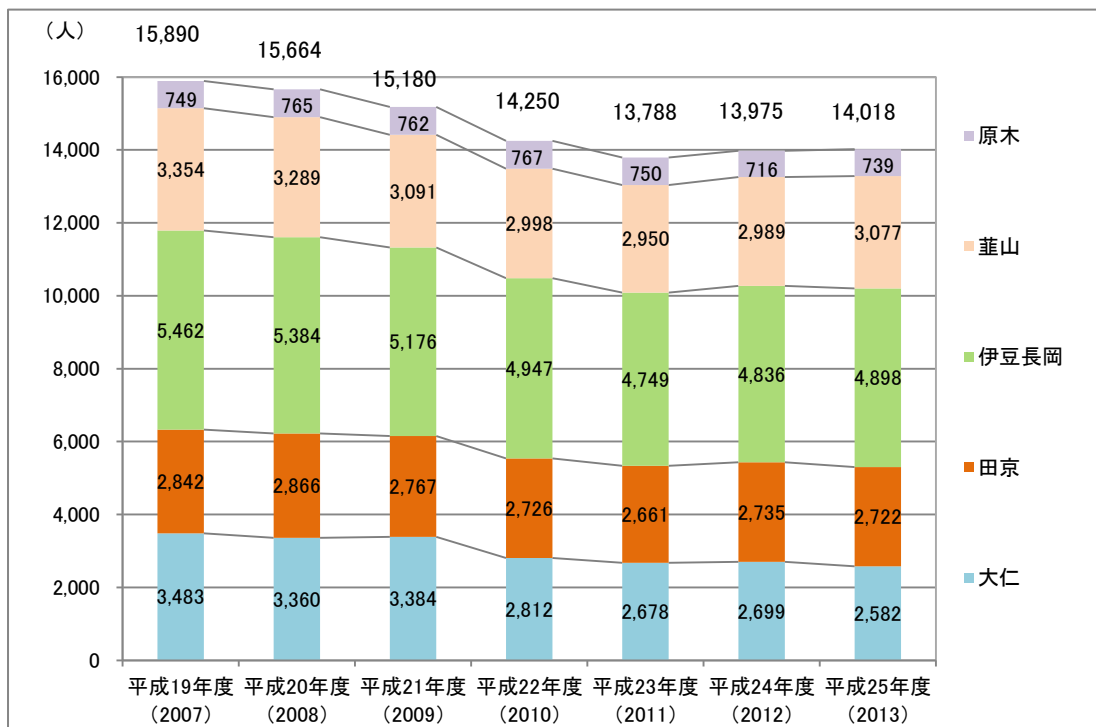
3 本市には、三島駅から修善寺駅を結ぶ伊豆箱根鉄道駿豆線があり、平野部中央の市街
4 地を連絡する形で南北方向に走っている。市内に5駅が立地している。

5 市内5駅の1日当たりの平均乗降客数は、平成19年度(2007)15,890人/日から、平
6 成25年度(2013)には14,018人/日と減少している。

7 5駅の中で最も乗降客数の多い伊豆長岡駅は、平成19年度(2007)時点で平均5,462
8 人/日であったが、平成25年度(2013)には4,898人/日と減少している。

9 乗降客数の減少人数が最も多い駅は、大仁駅で平成19年度(2007)3,483人/日から、
10 平成25年度(2013)には2,582人/日と約900人/日減少している。

11 図1-13 駅別1日平均乗降者数の推移



12 図1-14 鉄道図



1 (4) 産業

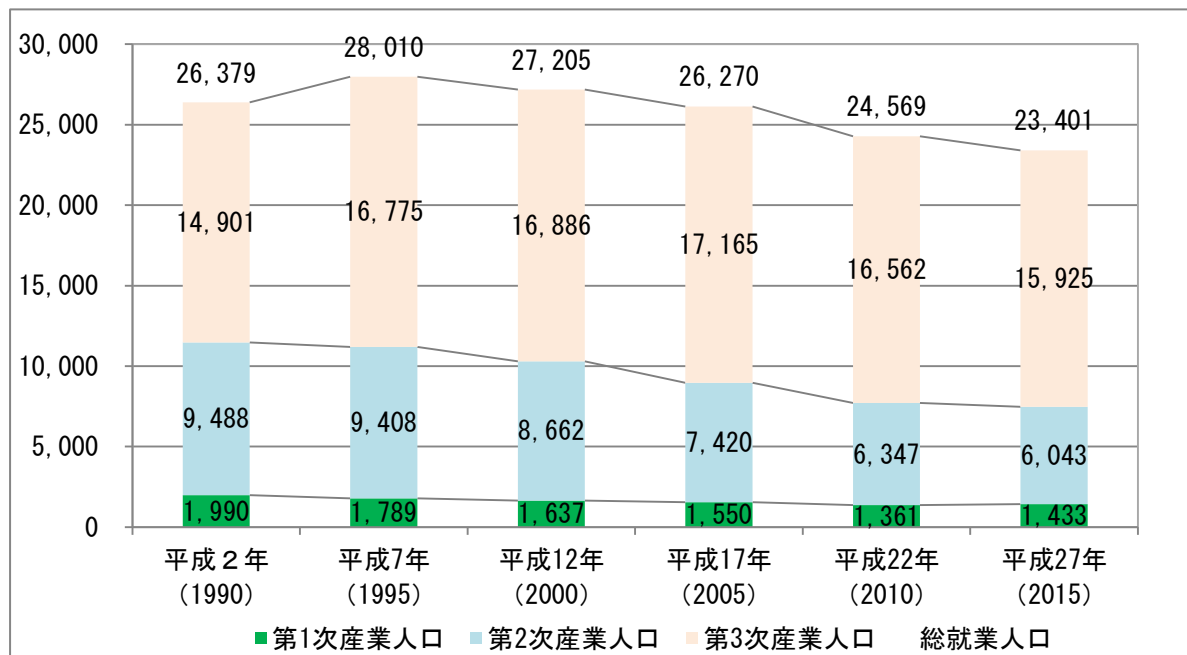
2 本市の産業は、農業、商業、工業、観光業がバランスよく結びついている。これは、
3 合併前の3町で、旧葦山町が1次産業、旧大仁町が2次産業、旧伊豆長岡町が第3次
4 産業という産業特性であったことも大きい。

5 第1次産業は、主要産業の農業において、観光農園も実施しているが、就業人口は
6 平成27年(2015)に微増している。

7 第2次産業は、大仁地区の企業を中心とし、それを取り巻く中小企業が集積してい
8 る。近年、就業人口は減少傾向にあるが、長岡地区の伊豆中央テクノタウンの西側を
9 工業用地として位置付け、企業誘致による就業人口の増加を目指している。

10 第3次産業は、近年の観光形態の多様化によって、宿泊・サービス業の就業人口が
11 低迷傾向にあるが、生活圏や行動圏の拡大で、郊外型の大型店舗の進出等もあり、平
12 成17年(2005)まで増加していたが、平成22年(2010)以降は減少している。

15 図1-17 産業別大分類就業人口の推移



37 資料：国勢調査 ※分類不能を除く

1 (5) 観光

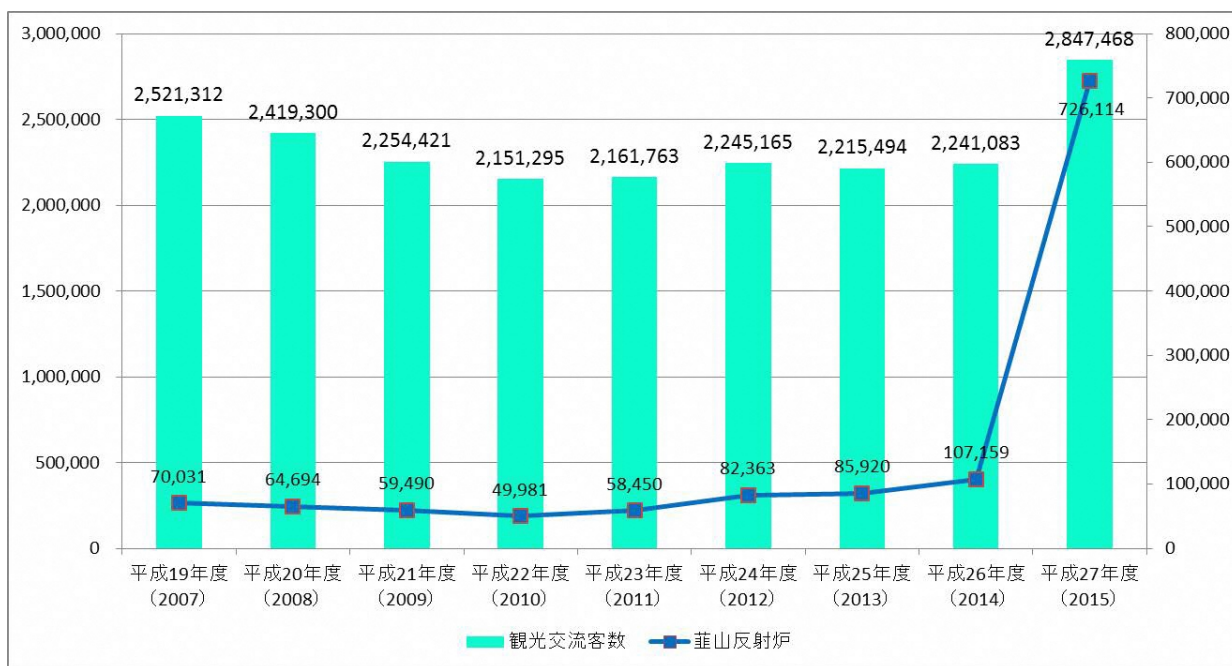
2 温泉が豊富で、本市の重要な観光資源となっており、源氏山周辺には長岡温泉、
3 古^こ奈^な温泉、北東部の山麓地帯に奈古谷温泉、畑毛温泉、守山周辺に葦山温泉、南部
4 には大仁温泉などが集積している。

5 本市の産業は、古くから伊豆屈指の温泉場として知られる温泉街を中心とした温泉
6 旅館や周辺の史跡、展望施設、狩野川のアユ釣りやサイクリング、イチゴ狩りやみか
7 かん狩りなどの観光と深く結びついた産業形態となっている。

8 本市の観光交流客数は、平成19年度(2007)から平成22年度(2010)までの4年
9 間で約37万人減少した。平成22年度(2010)から増加傾向に転じ、平成27年度(2015)
10 には、約70万人の増加となっている。

11 これは、平成27年(2015)7月に世界遺産に登録された葦山反射炉の効果で、葦
12 山反射炉への来訪者数は、平成26年度(2014)から平成27年度(2015)で約62万
13 人の増加となっている。

14
15 図1-18 年間観光交流客数の推移



37 資料：伊豆の国市統計書 観光交流客数の推移

【コラム】 韮山反射炉の世界遺産登録

韮山反射炉は、^{あんせい}安政4年（1857）11月着工から3年半の歳月をかけて造られ^{げんじ}元治元年（1864）に幕府直営反射炉としての役割を終えるまでに、鉄製18ポンドカノン砲や青銅製野戦砲などの西洋式大砲が鑄造された。

国内には、明治日本の産業革命遺産に登録されている資産として、萩、鹿児島、韮山（韮山反射炉）、釜石、佐賀、長崎、三池、八幡の8エリアに点在する幕末の嘉永3年（1850）代から明治末期の明治43年（1910）までの23資産があり、平成27年（2015）7月に登録名称を「明治日本の産業遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として国内19番目の世界遺産に登録された。

世界遺産登録以降の1カ月間の入場者数（7月9日から8月8日）は4万9,463人で、前年同期比の9.5倍に急増した。なお、平成27年度（2015）の入場者数は72万6,114人となり、平成26年度（2014）の約6.8倍となった。



「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産登録認定証のレプリカを石破地方創生相（右）から受け取る伊豆の国市市長



韮山反射炉

資料：伊豆の国市ホームページ、明治日本の産業革命遺産 日本の世界遺産ホームページ